明治10年代における関東地方の森林景観

小 椋 純 一*

Forests of the Kanto Region in the 1880's

Junichi OGURA

摘要：関東地方では明治以降、東京を中心とする都市域の拡大などにより、その景観は大きく変化してきたが、そのかつての植生景観については十分明らかではない部分がある。本研究は、関東地方で最初の本格的な地形図である迅速図の原図、およびそれを補完する目的で作成された『偵察録』をもとにして、明治10年代におけるその地の森林景観を明らかにしようとしたものである。その結果、当時、関東地方の森林の大部分は松林と櫟林であり、その林種分布には地域性が見られたこと、それらの森林の樹木にはかなり小さいものが多かったこと、また、官林や社寺林や屋敷林には、しばしば一般にはない大きな樹木があったことなどが明らかとなった。

1. はじめに

関東地方では明治以降、東京を中心とする都市域の拡大などにより、その景観は大きく変化してきたが、そのかつての植生景観については十分明らかではない部分がある。そうした過去の植生景観を知る上で、参謀本部測量課が、明治13年(1880)3月から同19年(1886)8月にかけて測図した関東一円にわたる2万分の1地形図、およびそれを補完する目的でその測図と同時に作成した『偵察録』¹⁾は、極めて重要な資料である。

当初「第一軍管地方2万分1迅速測図」と称されたその地形図は、今日では一般に迅速測図、あるいは迅速図と呼ばれているものである(本稿では以後、迅速図とする)。迅速図には、森林の主要な樹種までも詳しく記した原図²⁾(本稿では以後、これを単に原図とする)が今日まで残されており、それによってかつての植生景観はより明らかなものとなる。

ただ、原図は総数が900枚余り、一方、『偵察録』は全体で6千数百ページにも及ぶものであり、その資料の多さや、『偵察録』の記載の詳しさが偵察区域によって大きく異なることなどから、それらから、直ちにかつての関東地方の植生景観を述べることは難しい。

筆者が、それらの資料をもとにして、先に行った予備的考察³⁾によると、当時の関東地方の植生景観は、草地などの森林以外の植生景観も広く見られるなど、今日とは大きく異なるものであったことがわかる。しかし、当時も植生景観の大きな部分を占めていた森林の景観については、まだ全体的な詳しい考察が行われていない。

本稿は、上記の資料から、森林の樹種や樹高などの森林に関するさまざまな要素を測図単位ごとに抽出するとともに、それを図化するなどして総合的にとらえること

により、明治10年代における関東地方の森林景観の概要を明らかにしようとするものである。

2. 対象区域

ここで対象とするのは、関東地方のうち、図-1で示した縦長の方形の集合部分に含まれる区域である。これは、迅速図の測図区域であり、図-1中の小さな方形の一つ一つは、その測図単位である。そして、それは、その西南部を除けば、迅速図の発行図の各図幅の測図範囲でもある。

以下、本稿において、『偵察録』の記載箇所など、こ

図-1 対象区域

*京都精華大学人文学部人文学科

これらの各部の位置を示すとき、() 記号を用いる。たとえば、(1・A)は、対象区域の左上端の部分を示す。時々、() 内に(1・A,2・A)のように2つの測図区域があるのは、『偵察録』に2つの測図区域がまとめて述べられている場合である。

なお、図中、斜点線の部分は、『偵察録』に記載が全く見られないところを示している。

3. 林種分布⁵⁾

迅速図には、数haから10ha前後の植生では、それが全く記載されていなかったり、その林種などが正しく記載されていないことも珍しくないものと考えられ⁶⁾、また、1つか2つの樹種名が記された原図の森林の記載には、森林をどの樹種で代表させるかに苦労があった場合もある⁷⁾とはいえ、それによって檜や櫟を中心とした武蔵野の雑木林の分布状況など、明治10年代における関東地方の森林分布をかなり詳しく知ることができる(図-2)。

図-2 迅速図原図(東京府荏原郡世田ヶ谷村付近、×0.78)

〔本稿中の迅速図原図(部分)は、建設省国土地理院
長の了承を得て複写掲載したものである。〕

図-3は、そのような原図をもとにして、各測図区域ごとにどのような林種が多かったのかを示したものである。作図に当たっては、各測図区域中、農山村地域において森林が100ha以上あるところを対象とし、そこに見られる森林のうち明らかに3分の2以上を占めるものをその林種とした。その割合の測定は、本来できる限り厳密であることが望ましいことは言うまでもないが、原図では林種の境界が不明な場合も多いことなどから、厳密な面積の測定が困難であるため、林種の割合は原図上の記載をもとに慎重な目測により判断した。ただ、一部には、森林の樹種の記載がなく林種不明のところもある。

なお、原図中には、“榎”と記された森林が見られる部分があるが、たとえば、その文字が多く記されている(8・I)中の原図の接合部を、それと隣接する原図のそれと比較すると、そこでは“榎”とされていること、あるいは、『偵察録』では「榎榎多ク…」と記されている(5・

図-3 林種の分布

I)の森林は、原図では“榎”とのみ記載されていることなどから、それは櫟林に含めた。また、原図で“雑”と記された森林も同様に櫟林に含めた。

図-3は、上述のように必ずしも十分厳密な林種分布図ではないが、それによって明治10年代の関東地方の林種の分布の概要を知ることができる。すなわち、当時の関東地方では、松林と櫟林が森林の大部分を占めていた。そして、それらの林種のどちらか一方が特に多くはなく、両方の林種が混在するところも少なくなかったが、武蔵野や対象区域の北部などには櫟林の割合が特に多いところがまとめて存在するところがあった。一方、房総半島の周辺部などの海岸から比較的近いところ、および埼玉県羽生市付近(7・D)以東の利根川水系の沿線付近を中心に、松林の割合が特に多いところが広く存在していたことがわかる(図-1参照)。

なお、図でその他の森林として示したところのうち、房総半島の一部のものは、縦林や櫟林(13・N)(14・N)、縦林や松林(13・O)、および縦林や櫟林や榎林(14・O)がその主要な森林である。また、丹沢山地のものは、栲栗(ブナ)林や櫟林が中心である(3・L)。

4. 『偵察録』にみた明治10年代の関東地方の森林

上述のように、原図から明治10年代の関東地方の林種やその分布の概要を知ることができるが、『偵察録』から、森林に関するさまざまな記述をできるだけ多く抽出するとともに、それらを総合することにより、地形図では読み取ることのできない明治10年代の関東地方の森林景観やその背景を知ることができる。

『偵察録』には、森林に関する記述が数多く見られる

が、その記述からは、官林や社寺・民家周辺や路傍にはしばしば一般にはない大きな樹木があったこと、また、耕地周辺などにも樹林の見られるところがあったことがわかることから、ここではそれらを一般の森林と分けて考えることにしたい。

なお、本稿では、スペースの関係上、『偵察録』から抽出した記述の全体を示すことは難しいため、その引用は主な部分のみとした。また、それは、できる限り原文を忠実に記し、送り仮名や当て字などはそのままとしたが、略体字等、今日の辞書にないものについては書き改めた。また、『偵察録』の記述で同じ測図区域のものが複数ある場合があるのは、その区域がいくつかに分けられて偵察されていることなどによる。

(1)一般の森林

a)森林の大きさ

『偵察録』によると、官林以外の一般の森林あるいはその樹木には、「樹木(●●)大小相半ス」《11・G》《12・H》、あるいは部分的に、「間々廣闊ナル喬木林アリ」《8・K》といったものもあったが、「小樹」《2・B》《5・I》《13・P》《14・K》、「樹木●●小」《13・F》《14・G》、「喬木林●●ナシ」《5・G》《6・H》、「薄弱小林」《7・G》《9・I》、「荊蕀林若クハ小材林」《9・F》《12・G》《12・H》、「大樹ナシ(ナク)」《10・C》《11・C》《11・L》《14・F》《15・F》、「森林ノ称ヲ付スヘキ者ヲ見ズ」《7・G》などといったものが多く、また、その全体あるいは部分が「灌木」⁸⁾《6・I》《6・J》《7・H》《8・H》《9・I》《12・H》《15・K》《15・M》《16・M》《16・L》《17・B》《18・C》《18・D》、あるいは「稚樹」《9・I》《10・M》《12・H》《13・I》《14・I》《14・L》、「荊蕀林」《8・K》と表現されているものも少なくない。

一方、その具体的な樹木の大きさについてわかるものとしては、「大ナルハ四十米突小ナルハ三四米突(松杉榑榑)」《7・G》〔()内は対象となっている樹種、以下同様〕といったものも例外的にあるが、その他は「高五米或ハ十米(松杉)、高二米ヨリ四米(榑)」《4・M》、「見通一尺ヨリ二尺(松杉)」《8・H》、「高サ四ヨリ六米突(榑榑)」《8・I》、「目通り二尺以下(松)」《10・D》、「目通り一尺乃至三尺(松)」《10・E》、「大ハ平均壹丈乃至二丈小樹五尺乃至壹丈(松)」《11・F》、「樹高ハ大概四米突余ヲ過クルモノ稀(松)」《13・G》、「樹高ハ四米突ヲ過クモノナシ(松)」《13・J》、「丈ケ壹丈乃至壹丈五尺(松)」《14・F》、「丈ケ壹丈五六寸回り一尺乃至二尺(松)」《14・F》、「樹高ハ皆四米突以上ノ大木少ナク●●(松)」《14・J》、「大抵十米突以下(松)」《14・J》、「回り壹尺乃至壹尺五寸丈ケ壹丈五尺乃至式丈式三尺(松)、丈ケ七尺乃至五尺四寸回り八寸乃至式尺(榑榑)」《15・F》、「丈ケ三丈回り壹尺七八寸(松)、丈ケ壹丈式三尺回り八寸乃至壹尺壹寸(榑榑)」《15・F》、「目通り三四尺(松)」《15・K》といったもの

がある。これらの記述から、官林や社寺林などを除く一般の森林の樹高は、ふつつ高くても10mで、4m以下の森林も広く見られたものと考えられる。そのうち、松や杉には比較的樹高の高いものが少なかったたようである。

また、上記の《15・F》の一方の記述にあるように、榑榑林がせいぜい七尺(約2.1m)といった、かなり低い林が一般的であった地域が存在を知ることができる。そうしたかなり樹高の低い森林は、上述のように、「灌木」あるいは「稚樹」などと表現される森林が少なかったこと、また、森林と灌木地との中間的な林が武蔵野では少なからず存在したところがある⁹⁾ことなども含めて考えると、少なくとも地域によっては決して珍しいものではなかったものと思われる。そのような林は、『偵察録』の記述や、それと原図との比較などから、榑榑林には特に多く見られたものと考えられる。また、松林にしても、上記の《11・F》《13・G》《13・J》《14・F》《14・J》の部分の記述に見られるように、4m程度以下のものも少なかったことが考えられる。

なお、『偵察録』には、「高サ五六米突ノ稚樹アリ」《12・H》との記述例が見られ、「稚樹」との表現が、必ずしも灌木程度の高さの樹木を意味していないと考えられる場合がある。

樹木の太さについては、「見通」、「目通り」、「回り」などと記されている「目通り」が、「三四尺」《15・K》といったものもあるが、ふつつ松で1尺から2尺(幹周り)、榑榑ではそれよりもさらに小さいことが多かったものと考えられる。なお、「目通り」とは、現在ではふつつ「立木の、目の高さに相当する点の直径。」(『広辞苑』)との意味とされるが、『偵察録』では、樹高との関係や、それと同様な意として使われているように見える「回り」や「圍」などの言葉からすると、それは目通り周囲を意味しているものと考えられる。そのことは、明治の古語辞典的要素の大きい『大言海』に、「目通」の意味の一つとして「立木ノ太サヲハカルニ云フ語。(普通ハ、大人ノ地上ニ立チテ、其目ノ高サニ於ケル太サヲ量ル時ニ云フ)「目通周圍何尺」」とされていることから間違いないものと思われる。

b)森林の利用目的

明治10年代の関東地方の森林の大部分は、大木が少なく、また地域によっては相当樹高の低い森林が広く存在したものと考えられるが、そうした森林景観の背景には、どのような人為的影響があったのだろうか。そうした背景を考えることにより、当時の森林景観はより明らかになるものと思われる。ここでは、まず、森林の利用目的についてまとめてみたい。

『偵察録』には、森林の用途について、簡単ではあるが多くの記載がある。たとえば、「築材ハ榑松榑アリ」《4・L》、あるいは「林内ニ生スル樹木ハ大概建築及薪炭ノ

用ニ供ス」《10・D》というように、森林に建築用材となる樹木が少なからずあったことがわかる。ところどころにはあるが、「雑林繁茂シアルモ重ニ薪用ニ供スル櫛櫛等ノ樹木タリ」《7・I, 8・I》、「森林ハ波動地ヲ掩蔽シ概ネ薪炭用ノ松林」《14・F》など、森林が主に薪炭供給のために使われていたことを示す記述が対象区域のほぼ全域にわたって多く見られることから、明治10年代における関東地方の森林の主な用途は、概して薪炭であったと考えることができる。

また、『偵察録』には、「森林…(中略)…薪トナシ東京ニ輸出」《10・C》《11・C》など、薪炭が物産として輸出されていたことを示す記述が、対象区域のほぼ全域にわたって数多く見られるため、薪炭が不足しない地域では、それが東京や横浜などに輸出されていたところが多かったものと考えられる。

c) 森林の伐期

そうした森林の伐期は、『偵察録』によると、松や杉などでは、50年から100年といった記述《1・B》《13・E》《14・E》、あるいはそれに類したものもいくつか見られるが、それらは建材用などの特別なものである場合が多い。

そして、一般的には、たとえば松の場合、伐期が20年から30年程度のところが多く、櫛櫛林ではそれが15年から30年程度のところもある一方で、4年から10年とかなり短いところも少なくない。図-4は、『偵察録』からわかるそのような櫛櫛林の伐期の分布を示したものである。

なお、図中の空白部分は、『偵察録』に櫛櫛林の伐期の記載がなく不明のところである。

d) 森林の手入れと日常的利用

森林の中には、「林中ハ甚タ錯雑シ枝、枝ト接シ葉、葉ト交ハリ加之一切掃除セサル」《13・M》というように、

図-4 櫛櫛林の伐期の分布

伐採まで手を加えないものもあった。このような森林は、櫛櫛林に多く、「樹間行通自在ナラス」《6・J》、あるいは、「林中ニ入ル事ヲ得ス」《8・M, 9・M》《9・N》というように、林が密で通過が困難との記述がしばしば見られる。ただ、同じ櫛櫛林でも、「林内ハ毎年早春ニ下草ヲナシテ保護スル」《2・B》、「櫛櫛ハ冬時其枝梢ヲ斬伐スル事多シ」《8・K》といったものもあり、その手入れや利用は地域によって必ずしも一様なものではなかったようである。

これに対し、松を中心とした林では、「林内ハ年々下草ヲ芟除スルヲ以テ通過自在ナリトス」《4・A》、「年々下層ニアル枝葉ヲ伐取」《13・K》、「柴芝ハ土民伐刈日々ノ用ニ供スル」《14・G》、「毎歳林内ノ下草ヲ芟除」《16・C》といった記述が多く、林内が比較的すっきりとして通過が容易な場合が多かったことがわかる。

一方、「建築ニ用ユヘキ木材即チ松杉及ヒ竹類ハ多クハ居住地ノ周囲ニアルモノヲ用ユ然レトモ其不足ハ山林ヨリ之ヲ資リ故ニ山林中處々ニ斬伐セシテ成長セシムルモノ亦不尠」《12・L, 12・K》、あるいは、「松樹…(中略)…素上ノ宜シキヲ見テ建築ノ用ニ供スル者隅々アリ」《13・D》といった『偵察録』の記述から、松や杉などが選択的に建築用材として残される地域があったことがわかる。

また、建築用とは明記されていないものの、「松林…(中略)…樹間ハ櫛櫛等雑木繁茂シ通行スル事難シ」《8・M, 9・M》、あるいは、「松樹ハ甚タ粗小ナリ故ニ遠ク之ヲ望メハ宛モ疎林ノ如ク或ハ枯禿ノ如シ」《13・P》といった記述が少なくないことからすると、そうした森林の利用があったのは、対象区域のかなり広い範囲に及ぶものと考えられる。なお、原図の図郭外に描かれた視図¹⁰⁾の中にも、それらしき森林を多く見るができる。

他にも、目新しいことではないが、『偵察録』の「冬季ハ又落葉を拾集シテ薪木ニ供ス」《14・J》との記述から、落葉が燃料として利用されていたところがあったこともわかる。一方、『偵察録』と同時代の明治14年に出版された『東京府下農事要覧』¹¹⁾によると、たとえば、世田谷村についての記述の中で、「肥シハ木ノ葉ノ腐レタルト人糞二荷ニ糠半俵ヲ攪合セ六荷トナシ…」とあることから、おそらく落葉と思われる木の葉が広く肥料として用いられていたところがあったものと考えられる。

e) 水運と森林との関係

『偵察録』には、「荒川…(中略)…埼玉縣下ヨリ東京ニ種々ノ物品ヲ運搬スルハ多クハ此川ニ拠ル」《10・H》など、河川や海洋が、薪炭などの運搬にとって、極めて重要であったことをうかがわせる記述がある。また、「森林ハ皆私有ニ属シ其樹種ハ大概櫛櫛樹ニシテ他樹甚タ稀少ナリ土人ノ曰ク此地ハ運輸ニ便ナラザルガ故森林ニ松樹ヲ養生シ数十年ノ後ニ利益ヲ計ルヨリハ櫛櫛樹ヲ養植スレバ七年毎ニ伐木シテ之ヲ炭ニ製シ賣ルノ利益多シト

故ニ海邊ノ地ニ在リテハ松樹ニ利アリ山間ノ地ニ在リテハ檜樹ニ利アリ此地方ニ檜樹多キハ爰ニ依ルト云」《14・K》との記述もあり、海洋や河川と森林の利用形態や林種分布に相関があることが考えられる。

先の林種分布の考察において、武蔵野や相模野などに例外はあるものの、海岸から比較的近いところや利根川水系の沿線付近を中心に松林の割合が特に多いところが広く存在していたことは、このためである可能性も考えられる。

(2)官林

対象区域中、官林の占める割合は小さいが、そこには一般の森林にはない大木が多く存在するところがあった。たとえば、『偵察録』には、官林について次のような記述が見られる。

「丹沢山森林ハ官有ニ属シ其大サ西北東ノ間数里・・・(中略)・・・枸栗其他縦ノ類老樹鬱密ニ繁蔭セル一大樹林ナリ大山阿非利山ハ全面殆ト縦樹ヲ以テ掩フ皆数百年ヲ経タルモノナリ」《3・L》

「鹿野山官林中杉アリ凡二十万本其周囲ハ一米突ヨリ四米突ニ至ル」《12・N》

「縦林中ニハ大樹林ト云ヘキモノ甚タ多く実ニ幾百年ヲ経過セシヤヲ知ルニ由ナキモノアリ」《13・N》

また、他にも「巨大ノ樹木多シ」《14・N》《14・O》というところもある。これらの記述からすると、樹高についてはよくわからないものの、官林には一般の森林にはない大木があったことは明らかであろう。

ただ、官林といっても、その樹木が「建築ニ適スヘキハ僅ニ五分一」《11・M》、「樹木小ニシテ密」《13・F》、「或ハ樹木ヲ生シ或ハ荊蕀等ヲ以テ成リ・・・」《15・L》といったところもあった。また、官有の山であっても樹木がなく、「山脉ノ顛頂一体ハ全ク雜草ノミヲ生茂」《8・A》といった状態のところも存在した。

官林の面積については、それが数里にわたるような広大なもの《3・L》《14・N》《14・O》の中にはあったが、「面積千四百十坪」《5・L》、「廣袤大畧一町許」《8・M》、「概ネ狭小ニシテ擧クルニ足ラス」《15・K》といった小さなものも少なくなかった。

(3)社寺林

『偵察録』には、「大樹アルモ多く社寺民家ヲ包囲スルモノ或ハ路傍正列樹木ニ過サルノミ」《7・I,8・I》というように、社寺や民家の周辺や路傍に大樹があったことが記されているところが少なくない。

そうしたもののうち、社寺については、たとえば、「長者町北端ニ天神社アリ境内廣ク松樹林アリ羅列ス而シテ殆ンド百年生位ナリ」《17・M》といった記述があり、他にも「大樹林」《6・I》、「大樹」《7・I,8・I》《13・K》、「老木」《8・M》、「森」《10・G》、「大松」《13・M》など、大きな樹木がそこに存在したことを示す言葉が記されている

場合が多い。

しかし、「大樹アルハ社寺ノ境内等ニシテ又面積ハ最少ナシ」《13・K》、あるいは、「各寺院並ニ神社境内ニ僅カノ杉林或ハ松木アリト雖モ誠ニ僅少ニ過ス」《8・H》といった記述に見られるように、一般にその面積は大きなものではなく、樹木数もさほど多くはなかった。

また、上記の《17・M》や《8・H》の箇所の引用文のように、『偵察録』には社寺林の主な樹種が松か杉である例が多く見られることから、当時のその地の社寺林は、一般に今日のようにシイやクスノキなどの照葉樹の茂ることの多いものとは大きく異なるものであったと考えられる。

(4)屋敷林

『偵察録』中、屋敷林についての記述は、対象区域の広い範囲に及びかなり多いものの、「人家ノ周囲ニ大樹アリト雖図上ニ記スル能ハサルモノ多シ」《16・H》との記述にあるように、小面積のために迅速図上ではほとんど見ることはできない。しかし、そうした記載の多さは、屋敷林が地域の景観を記す上で重要な場合が多かったことを反映しているものと考えられる。

屋敷林についての『偵察録』の他の記述としては、たとえば、「家屋ノ近傍ハ老樹鬱々其中ニ楠、櫟、杉及ヒ松等其雜種大概三四十十年ヲ超ヘタルモノナリ建築ニ使用シ得ベシ」《5・H》、「家屋ノ周囲ハ大樹ヲ以テ掩フ者多シ是平坦ノ地暴風ニ方テ家屋ヲ保護スルノ準備ナル可シ」《16・K》、あるいは、「屋敷内ニハ数十年或ハ数百年ノ屋霜ヲ経歴シタル所ノ良木往々之レアリ」《16・G》というようなものが多く、防風や建築用材確保などの目的で比較的大きな樹木がそこに存在したところが多かったことがわかる。そうした屋敷林の樹種で確認できるものとしては、松、杉、楠、榎、櫟、樺などがある。

一方、「杉田村ノ山谷若クハ人家ノ周囲ニハ梅樹多シ」《8・L》、あるいは、「籬笆 土俗一般ニ家ヲ囲ムニ楨或ハ珊瑚樹ト称スル木ヲ植ヘ風害及ヒ梁上ノ君子ヲ防ク」《15・K》といった『偵察録』の記述もあり、屋敷林の状態は地域により一様なものではなかったことがわかる。また、「村落ノ生籬(小林立木ノ類)ハ甚タ多ラズ或ハ生殖セサル所アリ」《4・L》というところもあった。

とはいえ、屋敷林は、一般に高木の森林が少ない当時の関東地方にあって、次の『偵察録』の記述にも見られるように、しばしば目立った存在であったようである。

「総テ建築ノ材木ハ家屋周囲ニ生茂セシヲ伐採使用スルヲ常トス故ニ林内大樹少ク却テ居地ニ多シ」《7・C》

「土地隠蔽ノ景況ハ山地ト大ヒニ異ナリ其ノ然ル故ハ即チ防風樹ニシテ南風北風ヲ防ノ家屋周囲ニ在ル樹木ハ此ノ隠蔽ヲナスモノニシテ丘地ノ如キ景況トハ著ク異様ヲ現出スルナリ」《17・K》

(5)路傍の並木

『偵察録』には、「東海道ノ両側ハ老松ヲ以テ並列樹

ヲ為スコト一般ナリ」《7・L》,あるいは,「陸羽関街道ハ一般ニ列樹アリ」《10・D》というように,路傍の並木について記しているものがある。

それらの記述からすると,その樹種としては松が特に多く,また榎や栂も比較的多かったものと考えられる。また,一部には桐《7・H》や杉《15・C》の並木のあったところもある。

その樹木の大きさとして具体的に記されているものとしては,「目通り一尺許」《10・E》というものもあるが,「目通り四五尺ニ至ルモノアリ」《9・C》,「皆ナ目通り三尺以上之モノシテ間々八九尺ニ至ルモノアリ」《10・D》,「目通り四五尺乃至七八尺」《15・K》といったものが多い。また,「老松」《7・L》,「大樹」《7・I,8・I》と表現されているところもあり,路傍の並木には大木が多かったことが考えられる。

なお,これについては,迅速図からその存在を読み取る部分も一部にある。

(6)その他

『偵察録』から,耕地の畦や境界,あるいは河岸にも樹林が見られたところがあったことがわかる。そのうち耕地畔の樹林については,武蔵野付近を中心に多くの記述が見られる。

そうした耕地畔の樹木としては,桑,榎,栂,榛(ハンノキ),桐などがあったが,地域によって植えられる樹種は異なっていたものと考えられる。また,そうした樹林のあるところでは,樹木は概してさほど大きなものではなかったが,「艸木繁茂ノ期ニ至レハ展望ヲ遮キリ…」《6・H》といったところが多かったことがわかる。

また,河岸には,「相模川玉川小鮎川温蘇川…(中略)・堤塘上竹藪ヲ以テ隠蔽セラルル所アリ」《5・L》との記述にあるように,竹林や榎などの樹林のあるところがあったことがわかる。ただ,これに関する記載が少ないことから,対象区域の河岸ではそうした林の見られないところも多かったものと考えられる。

5. むすび

以上,迅速図の原図や『偵察録』から,概して人為的

影響の大きかった明治10年代における関東地方の森林は,(1)松林と榎栂林が多かったこと,(2)松林は海岸沿いや利根川沿いに特に多く,榎栂林は武蔵野や相模野や対象区域の北部に多く見られるところがあったこと,(3)官林などの特別な森林を除く森林の樹木には10m以上の樹高のものは少なく,4m以下のものも広く見られたこと,(4)特に榎栂林には低いものが多かったこと,(5)高木の樹木は,官林,社寺林,屋敷林,街道の並木では多く見られたことなどが明らかになった。

(註)

- 1)『偵察録』は,『明治前期民情調査報告「偵察録」』としてマイクロフィルム化され柏書房より1986年に発行されている。
- 2)建設省国土地理院蔵のこの原図は,『明治前期手書彩色關東實測図』として財団法人日本地図センターにより1991年に復刻発行されている。
- 3)小椋純一(1993):明治中期における房総丘陵の植生景観,造園雑誌56-5,25-30。
- 4)小椋純一(1993):迅速図の植生記号概念に関する研究,京都精華大学紀要第5号,40-69。
- 5)ここでの林種とは,森林を構成する主要な樹種を問題にしたものであり,その高さや密度等を問題にしたものではない。
- 6)前掲3)4)
- 7)前掲3)4)
- 8)迅速図では,「灌木地」を森林と分けて記載しているが,『偵察録』で「灌木」と記されているところが迅速図では森林となっている例が多く見られる。ここで取り上げるのは,そうしたところである。
- 9)前掲4)
- 10)軍隊の進行の目標となる神社や独立樹などを描いたもの。図郭外に描かれているために,大きなものはないが,その描写は割合綿密なものが多い。
- 11)国立国会図書館蔵。

Summary : Forests of the Kanto region in the 1880's were studied mainly through the drafts of the geographical maps surveyed then and the reconnaissance notes to support the maps. The results are as follows. ① Most of the forests there in those days were those dominated by Pinus species or those dominated by deciduous Quercus species. ② Forests dominated by Pinus were common in the areas near the sea and the courses of the Tone River, and forests dominated by Quercus were often or sometimes seen in Musashino, Sagamino and the northern part of the Kanto region. ③ Most trees of the forests were less than 10 meters in height in general, and there were areas in which forests less than 4 meters or even less than 2 meters were commonly seen. ④ Such low forests were common especially among those dominated by Quercus. ⑤ High forests or trees were often seen in the government-owned places, near temples and shrines, near houses, and along roads.